



ブック

置かれたのは自分の責任なのだから、人を頼らずに自力でそれを克服しろ」という意味である」と批判する。当時の「若者論」について、学校にも通わず就職もしない、無気力な若者を指す「ニート」ということが流行し、ゲームや携帯電話に耽溺した結果、人間として劣化してしまったという疑似科学的な議論が横行したという。

第2部においては、社会問題の原因を若者たちの依存的な心理に帰着させる一連の言説を「心理主義的若者論」と呼び、それらの論者が科学的方法ではなく、「ライフコース規範」とも呼ぶべき「常識的知識」に依拠していたと批判する。第3部

小谷氏は、2001年の新自由主義的改革における小泉首相の「自己責任」というキーワードについて、「困難な状況に

小谷 敏 編

2700円 世界思想社
☎075-721-6500

二十一世紀の若者論

あいまいな不安を生きる



評者は考える。教育は、生徒の自己決定能力を育成しようとする。そのとき、自己決定の余裕のない「困難な状況」もあるのだという社会的視点を持つ必要がある。オタク文化の現代的意義も認識する必要がある。そのうえで、状況のせいにはせず自己決定する若者を育てることによって、彼らの個人としての充実と、自己決定ができる余裕のある社会の支え手としての充実を目指すことこそ、教育の不变の役割といえよう。

（聖徳大学教授・西村美東士）

においては、クールジャパンについて、80年代末の少女連続殺害事件の記憶とともに語られ、おぞましいオーラに包まれていたオタク文化が、2000年代の半ば以降には、「ポピュラー文化の豊饒」を示し、日本の魅力の源泉とみなされるようになったと評価する。その文化は、困難な状況に置かれた若者たちにとって生きる希望とさえなつたと指摘する。